82

日本學大意

安藤芳榮

八3
1510

元天地の間ふ生ずる所の天地は絶て寄さふる
ものなし其天地の理とするハ四方陰陽の此環さるふ
より起る也四方陰陽とハ東西南北の四方なり
陰陽備り順環するハ絶いつる也南北ハ動ける極
星あり其目書陰あり其目とハ東西の極星も
なく其目南北ハ東西と定ふ和なくこれ東
西南北なくさるものとハ人あまとなる見ハ目南北
はこ陀目天性の理を弁へさる故也易経にも
天地ふ東西南北の四方を立又特の四隅を分ち

東西は少陽西は少陰南は太陽北は太陰とする
る説く聖人の定め言ふ所也然るに四方陰
陽備らずんば天地の形立たせんや天の
行道の盈ちも日月星辰東西へ環るるのは
女輩も知ふ如く天は地を蹈へて動き地は天を
戴て止る故に陰陽の動ひく止て形を成す所也
理を以て時は東より西へ太陽太陽老陽と天の
陽氣は地を環り昇て西より東へ少陰太陰老
陰と地は西より降て東に復て止る

お陽を以て東とし〜お陰とするは西とする
なり此陽に陰を以て日月星辰を環る
故一陽一陰の行は方り昇て方に降るへき
也少陽太陽老陽の運ひある故鳴て昇て
圓るを降る勢ひなるへし然るに太陽老
陽は東西の表少陰太陰老陰の東西の裏なり
東西の表は天地の表にして白昼にして東西の
裏は天地の裏にして黒夜にして天地の東西一
日昼夜成分所也又南は太陽とするは陽氣

南に移り日月を大陰とする故の陰氣北に移りて一
度の四方（南方は陽氣盛ん一度の四方北方
の陰氣とあるなり也南方は陽氣発生の
初め夏冬至となり其陽氣響んあるは春夏
とも号し又北方の陰氣起る初めを夏至と云
陰氣孫響んなる故故を号け一年四季を
定む故に南方の陽氣起るとその陽氣より
陰まりて冬至となり春夏は日月星辰も北方に
響く陰氣は北方の陰氣起ると其陰氣より

陰まりて春夏となる故故に日月星辰南方に寄り
北に潜す右のごとく東西は止らずして天性の
屋敷は自ら南北に止まる故ひとく一年四季と定
物なる近来毒虫は下を大熱とし南極の極の
下は大寒とする故なり世上一般に暑寒の
日は日本の影頂よりなり暑は赤道のごとく
ごとく甚暑はなしとなり赤道は下のごとく
以て大暑は熱すること沸んまい赤道は下を
大熱とし暑寒は暑は赤道とする故なり

四方陰陽を元用ひたもうん日月の行程行て東西
巡りの如と成て南北へ左旋なるや四方陰陽の所
なるるの明らかの也強て四方陰陽ハ天地の方隅を
定てさんあるのことく今宮の備へ定る也
其地の氣候風土とるの地ハ緯ハ時候変化
して寒暖時の風俗生し暖かの時ハ南風を生じ
寒風南極の極より吹来るに依服装の厚薄
其風土とるの人吹の暖かの吹ハ必ず多く
南の寒暖の差別あるるの如きて天下の地ハ

南北陰陽の分ちあるの是又東西一周ハ陽光陽
陽ハ陰大陰者陰ハ分ちあるを東西ハ消滅する
其國土地の風土とるて三陽三陰の六ツの分を
生ず三陽三陰の内ハ東西初中後の差別
行のつく細密の分ハ日本ハ南北ハ於て東西と
其地と離るる所ハ西人の風俗人氣も異るるあて
唐土の形勢風俗を知ら天下の地ハ東西氣
運の遠ひあり極まハ四方陰陽定て天世界の氣
候風土とるの明らかるて有古国山川の極

特にあらく又其氣俗國風に成て遠ひあるの特に知る
為て家を建て人を立て元来日本は東方に当り
天竺は西方の國と云漢土は其間にあり是天性の
東西にあらく日本は東方にあらく天の行を陽
の風に云ふ漢土は西方に陽の氣運と云ふ天竺は老
陽の運ひとなる故也の遠ひはあまたこの國々を
東西の義にて天地の表裏に異なり南北の義も
亦格と云ふ南國に生て豊なる人の性質も
天性と全く変て天性を尽す國なる故神儒

佛の方法も一代を世界に西目改上のことく天地の
変氣に成変ぬよりこれ人國女人國女食人國の
異國と云ふる也中にも日本は東方に異なり日く
日出一周すること不なる故日の本とも称し天地東方
少陽の風に倣ふる故陽は天地の氣運に成なる故
天神の本に本なく神是変化に開けて日本に異国は
天神七代地神五代天人惟一にして神国と称する
自然の勢ひ也然ること時移り終て人皇の位と成る也
人皇の位と成ぬ人皇ふ移り変ら武徳と云て神

代の位勢ひ給ひ世給ひ人和
なる故なれば神武の位をも暗くさを給ふ人和
神武天皇を御さ事れた故なれの御功ある人公は
位ゆる和人皇こそ国事立ち天神と仰き
地神と和け人皇こそ和給ふ地人の三才を尽すの
武徳の自然の別事朝は天性国事立の意天は方
方陽ふ威徳全さ和ふ人こそ神の位の得新
さこそ武徳の別強理と和人新と云皇心は神明ふ
止皇新のさ和は武を極さ故也新ふ事を根元今に強も

天性ふく日本の国ふ行ふく天の行を陽の
氣運作事に変ふ故春を春は生くする
勢ひの主は氣候風土も若く健ふて人の性
質も和てさとく四直はいあつく武く敬ふ匹夫
ふ和ふ故て死厳さ人の義ふ法ふく天神を尊
ん威儀備ふ国也故ふ上は神武の明ふ和
ひて下は別ふ新もなく道成立すて自然ふ
尊を踏ふ和あつく道を立ふ外国と
一日ふ稽ふ為ふ行ふ和也漢ふは事高の国ふ開け文

陽の二氣運なる故に人間に含む物ひ
落く雲の裏に含て雨を生ずるも二氣
搭ひ合ひ熟揉し同じく含む物ひ落ちるごとく
氣候風雨も同じたに異けて雨ひある故人質
も亦義理に響んじ其力弱く溫厚なる所
あつて故に変門も弱く容性なる人なり
帝位を襲て國号を改ふれば君義も敬出来
るなり是にてつく為に教を立て人を導ける
ことを考へるとせられば國家治まりて兄あ

故文學儒道を以て國政の元とする事なるし
其教とする所和を仁義に行ひ
原順にして為こと厚く亦一地の
天理に従ふ人質あり如天道に法る所あ
人質は溫厚なる所和ある故なり故に孝道を
主として忠義は次とし日本は是に反して天
道の神武を本として地の義愛を
含こと多く要とする故に義を重んして孝
道は後に次是皆天性の物ひより出る所の自

佛法まで神道儒道は遠ひとつの色天竺は西方に
寄り太陽の氣を受て事の多く物柔和なる
ほむ時宜よりとく氣後風土も閑静なる人質も
落情にとく物よ云哉しかして愚癡なる私人色の教
も立かたく云事おのれ行て後世は菩薩法示し
教て佛に成さとし今世を治る佛を置けたる
ゆえ行ふの時は三教も一言の内に尽
其一端おのれ三教のちひなる天地の極まるのき
わとく其味ひを味ふ中にも本朝の神武

の尊は天神は歳徳佛ふ神国の風土なる武尊
の自然は別天道の自然にとく儒仏の大ひなる
信を以ては神武の尊は隆光なる尊し加ふの
大道も世西に生まれてとく知るるの沢は中古遠結し
て既ふ絶果んとなる物を知るに上形
儒信教ありとく回典を使り接年の功ありて上古
神武の大道無ひ世の部を記述御伝来ふ
知るとなれ共その実は伝ふるは稀まれして軍法
の教ありて而ふみを知て軍学と称するは歌のし

きるのあまりて我国の大臣むすびからん事をと
欲しらく其一端を記しむる也稿其書綴二十二巻に
全けまへ其数ゐあまりて武政の稽法人倫の奥
儀を明らとなし

文政八酉年冬

冨永不盈斎敬白

牛込まつ店上冨士見通り
南本法町ゟ入口横
田安殿目付

富永大作造之